

定期預金種別選択行動の計量化

小西 希良

1. はじめに

石油危機を契機とする狂乱物価は、既存の経済秩序を不安定にし、市民は買い占め等の生活防衛手段をとった。異常な物価上昇は市民に将来の実質的な所得の動向に不安を感じさせた。この時点に対応するかのように、銀行預金種別(金利、預入期間)の改訂が行なわれた。

銀行預金種別の改訂に対して、預金者はどのように自己の銀行預金構成を変化させたであろうか。また預金者が金融資産の保有形態を決定するとき、いかなる要因を考慮するであろうか。情報社会と言われる今日でさえ、われわれ個々人が知りうる情報は質・量ともに完全ではなく、個々人が知りうる限られた情報と個々人の嗜好(価値基準)によって、さまざまな意思決定を強いられている。すなわち、個々人の経済環境により、将来の自己の経済的位置を予測し、資金需要の時間的分布に従って、預金構成比を決定する。このような預金者個々の連続的な意思決定の結果として、銀行預金種別構成比が推移していく。この推移を預金金の預金動機をもとに計量

的に把握しようとする。

2. 預金者の資産選択行動について

銀行預金に対する資金配分と言えども、預金の側に危険性はないが、預金する側には、将来の流動性欠如に対する危険性がある。ポートフォリオ理論によって、銀行預金種別間の選択がどのような要因によって決定されるかを考えよう。

2.1 個人について

個人が流動資産を保有する動機として、取引動機および予備的動機、流動性選好、危険回避、利得動機がある。流動資産を保有する個人は危険と不便が減少する代わりに、資産の期待利回りが低下する。個人が平均利回りの低い資産を選ぶ理由としてつぎの点が考えられる。

① 借入れは、費用を要し、また不都合をきたすことがあるため、多くの人々は所得および支出の短期的変動に足るだけの流動資産を保有することを欲する。

② 資産管理は規模に対して、費用逓減的な活動である。危険を伴う資産を選択することに対する現金および努力という観点からみた費用は、小規模の資産運用より大規模の資産運用のほうが投資単位当たりについて少なくなる。

③ 少額の資金保有にとって、受けとる金利は、金利の差異に対して、その絶対額において差が少ないため、より拘束期間の短い運用形態のほうが有利である。

2.2 企業について

企業は取引から生ずる現金の流れの変動にもとづいて、流動資産保有額の変動を生ずるが、留保利益、設備支出、在庫増減ならびに租税留保、納税なども変化する。企業がこのようなして発生する資金をどのような形態で運用するかは、個人より運用範囲が広い。しかし企業の本来の機能からみて、銀行預金に長期の資金運用を期待しているとは考えられない。しかし、企業は種々の理由によって流動資産を保有することを欲する。

① ある最低限度の流動資産は絶えず、銀行から借入

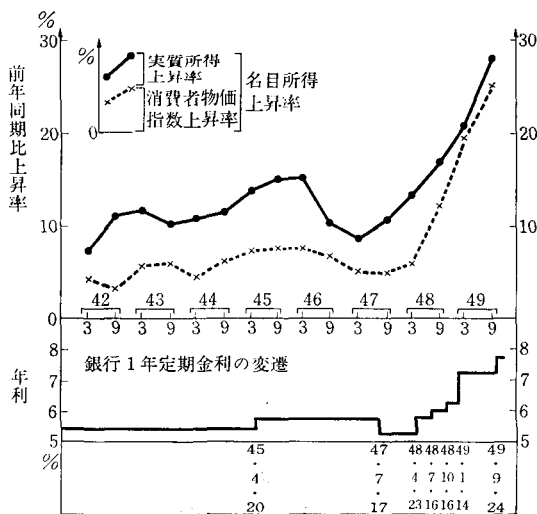


図 1-1 大衆の経済環境と預金金利の変化

れたり返済することなしに、日々の収支変動に対処するため必要とする。

② 多くの企業では現金の流入に季節変動がある。企業のなかには現金流出が流入を上回る季節に借入れ、流入が流出を上回る季節に借入れを返済する方法を選ぶものもあろう。しかし他の企業は季節的な現金流入超過期には、余剰流動性を保有する。このようにするとき、その企業は長期資金コスト、銀行借入れ費用および流動資産利回り相互の関係によって決定される利子犠牲を被る。しかし企業は景気後退期に短期負債を負うという危険を減少させ、かつ流動比率の改善によって長期借入れ費用を減少させることができる。

このように、企業はしからざる場合に必要とされるよりも多くの機会費用を支払うことによって便益を得、また危険を減少させる。

個人・企業ともに将来の不確実性のゆえに流動性資産を金利からみた最合理点以上に保有していると言えよう。銀行定期預金は明らかに流動性資産の一部を構成しており、大局的な大衆の選好の方向と無関係ではありえない。ただし、注意を要することは、個人と企業とは銀行定期預金に対する利用動機が異なっており、このことは本モデルの精度に影響を与えるであろう。

3. エントロピー・モデルの設定

前章で得られた推論をもとに、計量可能なモデルを設定する。モデル全体に流れている思想は「預金者は全体として必ずしも最合理的な行動をしているのではない。」ということである。預金者を構成している個々の経済主体が、経済学で言う「効用極大化原理」に従って行動しているということと矛盾しない。各経済主体は個々の効用関数を基準として合理的な行動を取ったとしても、基準となっている効用関数(=価値尺度)の相違によって預金者行動の結果は、全体としての最合理点より乖離するであろうということである。このような預金者を構成する個々の経済主体の多様性を基礎とするモデルを作る。

3.1 エントロピーについて

モデルの基礎となっている「多様性」の数学的な尺度エントロピーについて簡単に触れておきたい。

エントロピー (entropy) は離散標本空間における確率的事象に対する「あいまいさ」の数学的な尺度を設定する。情報を受けとらないうちは、AでもBでもありえたことが、情報を受けとったことにより、たとえばAと決まり、Bの可能性が消失する。一般的に情報は二者択一の情報に分解することができ、まったく同等な2つの可能性のうち一方を指定できる情報を単位量の情報と定義

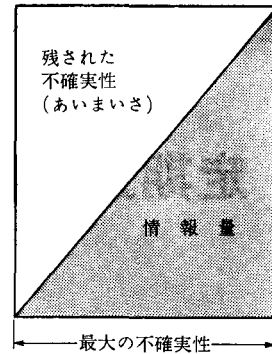


図 3-1-1 情報量と不確実性

し、この単位をビット (bit) という。情報は同等な可能性の個数が N 個の場合、そのうち1つを特定するに足る情報量 H は、 $H = \log_2 N$ (bit) で与えられる。いいかえるならば、情報量の大きさは初めの「あいまいさ」と関係する。一般的に、標本空間を確率 R_K をもって生起する互いに排他的な事象 E_K に分割しよう。この標本空間のもつ「あいまいさ」、または E_K のすべてを特定しうる情報量 H は $H(P_1 \dots P_K) = - \sum_{K=1}^N P_K \log P_K$ となる。そして H なる量をエントロピー (entropy) とよぶ。この情報量を測る尺度、エントロピーを利用することによって、われわれが知り得た情報の量を測定することができる。一般的にわれわれが得る情報量について、

[情報量] = [最大のエントロピー] - [残存するエントロピー] となる。

3.2 預金者の行動とエントロピー

預金者は、異なった意思決定者の集合であり、仮に預金者が金利を最大にするよう行動するとしても、銀行が提供しうる情報力、または2章に述べた預金者個々の事情に左右される。このような意思決定者の価値感の多様性および情報伝達の不完全性を考えるならば預金者行動全体は一般的に図3-2-1に示される「半システム」の状態にあると考えられる。すなわち個々の経済主体が得た情報によって、ケイオス状態からシステム的な状態に移動するが、完全なシステム状態に移動し、合致することはない。この移動の程度は個々が得た情報の強さ……経

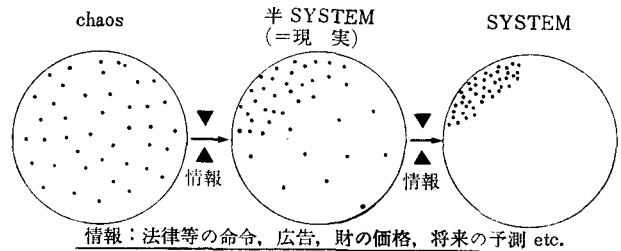


図 3-2-1 情報と大衆の行動

済的行動であれば情報が与える利益の大きさ……によって決定されるであろうし、移動の速度は情報の伝達される速度および精度に影響されるであろう。

4. 平均預入期間所与下での定期預金構成比の推定

預金者があるべき平均預金期間をすでに決定した場合、つぎに預金者はいかなる定期預金構成比を選択するであろうか。

金利因子モデル

仮に預金者が預入期間になら注目せず、単純に獲得しうる平均金利が最大になるよう行動した場合、どのような定期預金構成になるであろうか。現在、銀行定期預金種別中、最大の金利がついているのは2年定期であるから、すべての預金者が、すべての資金を2年定期に預入すると考えるべきであろうか。しかしそれでは預金者に金利獲得に関して厳格な行動を想定することになる。逆に、各定期預金種別に、結果として均等に分配するとしたならば、預金者はなんらの預金金利に対する情報を得ていないことになり、またこのことも現実的でない。したがってつぎの仮定をおく。

仮定1：預金者はできるだけ獲得する金利が最大になるように預金構成比を決定する。

仮定2：預金者はできるだけ、全体として無秩序な状態に移動する。

これらの仮定のもとで預金者が単純に獲得しうる金利が最大になることを目的として選択するであろう預金構成比を推定する。

\bar{R} ；預金者が獲得する平均金利

H ；預金種別選択に伴う預金者行動のエントロピー

ただし、 $\bar{R} = \sum_{i=1}^N r_i q_i$

$$H = - \sum_{i=1}^N q_i \log q_i$$

$$\sum_{i=1}^N q_i = 1, q_i \geq 0 (i=1 \dots N)$$

N ；定期預金種別数

r_i ；第 i 種の金利

q_i ；第 i 種の構成比

上記の仮定を同時に最大限、満足するようにそれらの積 $(H \cdot \bar{R})$ を $\sum_{i=1}^N q_i = 1$ の制約下で最大にする q_i の組を唯一組得ることができる。ラグランジュ未定乗数法により、

$$(4.1) Z = H \cdot \bar{R} - \lambda \left(\sum_{i=1}^N q_i - 1 \right)$$

$$(4.2) \partial Z / \partial q_i = -(\log q_i + 1) \cdot \bar{R} + H \cdot r_i - \lambda = 0$$

両辺に q_i をかけ i について合計すると、

$$(4.3) \lambda = 2\bar{R} \cdot H - \bar{R} \quad \text{が得られる。したがって、}$$

表 4-1-1

| | 定期預金種別 | 3カ月もの | 6カ月もの | 1年もの |
|----------|----------------|--------|--------|--------|
| 昭3 和月 | 金 利 | 4.00% | 5.00% | 5.50% |
| 42 年 | 金利因子による 構成比 | 27.46% | 34.27% | 38.28% |

$$(4.4) q_i = \exp(H/\bar{R} \cdot r_i - 2H) \text{ となり、}$$

$$W = \exp(H/\bar{R}), U = \exp(2 \cdot H) \text{ とすれば、}$$

$$(4.5) q_i = W r_i / U \text{ となる。}$$

したがって、制約 $\sum_{i=1}^N q_i = 1$ を満たすように、

(4.6) $\sum_{i=1}^N W r_i = U$ とし、この等号が成立する W, U を得ることにより q_i を得ることができる。たとえば昭和42年頃の定期預金種別について q_i を計算すると表(4-1-1)となる。

判別関数モデル

しかしながら、預金者が平均預入期間に注目しないということは現実的ではない。したがって金利因子モデルで推定された構成比 (q_i) を基準とし、制約として与えられた平均預入期間を満足したうえで、エントロピーが最大になるように、新しい構成比 (p_i) を推定する。

判別関数 $D = \sum_{i=1}^N p_i \log(p_i/q_i)$ は最小の値をとるときエントロピーが最大になることが知られているので、この判別関数を、平均預入期間の制約のもとで最小とする構成比 (p_i) を得る。

$$(4.7) D = \sum_{i=1}^N p_i \log(p_i/r_i) \rightarrow \text{最小}$$

$$\text{制約 } \bar{M} = \sum_{i=1}^N m_i p_i$$

ただし、 D ；判別関数

q_i ；金利因子による第 i 種の構成比

\bar{M} ；与えられた平均預入期間

p_i ；求める第 i 種の構成比

m_i ；第 i 種の預入期間

ラグランジュ未定乗数法によって、判別関数 D を制約 $\bar{M} = \sum_{i=1}^N m_i p_i$ のもとで最小とする構成比 (p_i) の組を唯一組得ることができる。つまり預金者は結果として定まった平均預入期間の制約のもとで、かつ全体としての無秩序性を基礎として、できるだけ獲得する金利を最大にすべく行動した場合、どのような構成比になるであろうかを尋ねている。

たとえば昭和42年3月末の平均預入期間で計算してみると表4-1-2となる。 χ^2 検定を利用して検定を行なうと有意水準5%で棄却できない。

以上の「金利因子モデル」・「判別関数モデル」をまとめて図示すると図4-1-3となる。

表 4-1-2

| | 定期預金種別 | 3カ月もの | 6カ月もの | 1年もの |
|------------|------------------|-------------------------------|--------|--------|
| 昭和42年3月 | 金利因子による構成比 q_i | 27.46% | 34.27% | 38.28% |
| | 判別関数による構成比 p_i | 5.54% | 15.04% | 79.43% |
| | 現実の構成比 | 8.17% | 11.10% | 80.74% |
| χ^2 値 | | 2.30 < 3.84 (自由度1, 有意水準5%) | | |

ちなみに、預金者の全体としてのエントロピーを考慮せず、預金者が1人の意思決定者として、平均預入期間が等しく、かつ金利が最大になるような構成比を参考までに図の最右辺においた。図において明らかなように大衆行動の無秩序性を考慮したほうが現実をよく説明している。ふりかえって見ると、今までの計算過程は仮想的な無情報状態に預金者が預金種別を選択する場合にだれもが考慮するであろう情報（平均預入期間を除いてパンフレットにすべて記載されている。）をつぎつぎに与えることによって仮想的な現実を作り上げてきたわけである。そして驚くべきことに、現実の結果に比較的良好に合致している。

チャネル・マックス理論

しかしながら、このような方法のみで、合理的に現実を推定できるためには、定期預金特性(金利・期間)の改訂頻度が低いことが必要である。つまり預金者が金利お

よび預入期間について情報を十分もっており、改訂後預金者が個人個人の望む預金構成比に調整できるだけの十分な時間の経過が必要である。したがって、このような前提のおけない場合のために、つぎに「調整速度」の考え方を説明する。

昭和46年以降は定期預金特性の改訂が激しく、改訂情報が必ずしも、預金者に到達しているとは限らない。また情報の伝達と同時に預入可能な資金が運よく手許にあるとは限らないであろう。または定期預金の期日が到来するとも限らない。したがって預金特性の変化に対する預金者の「調整速度」を考慮する必要がある。すなわち、預金者は「判別関数モデル」が示す推定預金構成比に近づこうとしているが、情報の欠如とか、調整可能な資金が手許にないとかで即座には近づけないと考える。

そこでチャネル・マックス理論を利用して、預金者が判別関数モデルにより得られた構成比にどのくらいの速度で調整しているかを測定してみた。

$$C = \alpha_t A + \beta_t B$$

を満たす α_t, β_t の最尤推定値を計算する。

ここで、

$$C = \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_N \end{pmatrix}; t \text{ 期の定期預金構成比}$$

$$A = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_N \end{pmatrix}; t-1 \text{ 期の定期預金構成比}$$

$$B = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_N \end{pmatrix}; t \text{ 期の判別関数モデルにより得た構成比}$$

α_t ; 前期の構成比が t 期の構成比に与える影響力

β_t ; t 期の判別関数モデルによる構成比が t 期の構成比に与える影響力

$$\alpha_t, \beta_t \geq 0 \quad \alpha_t + \beta_t = 1$$

である。つぎに下記の式により月単位の「調整速度」(ρ_t)を得る。

$$\rho_t = \beta_t / \alpha_t + a_t$$

ただし、 a_t ; 測定時点間に定期預金特性の改訂がない場合は6カ月。

; 測定時点間に定期預金特性の改訂があった場合には改訂時点からつぎの測定時点までの月数と予告期間として1カ月の和の月数。

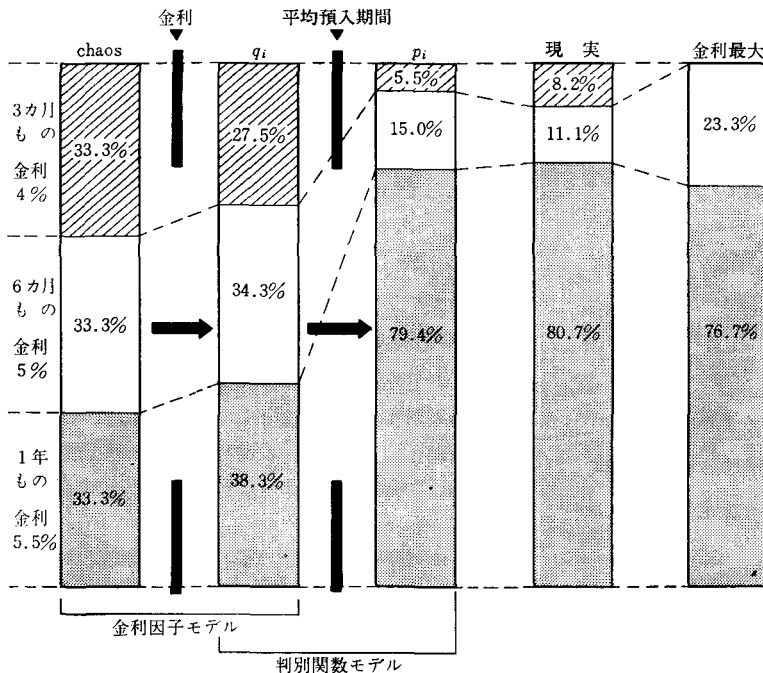


図 4-1-3 分析例 (昭和42年3月時点)

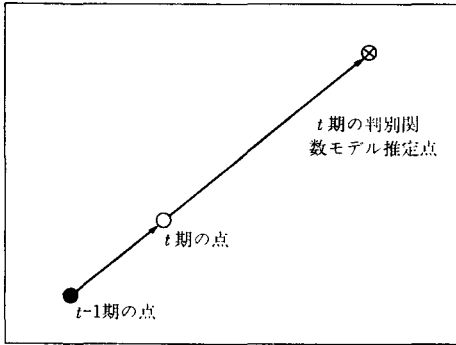


図 4-1-4

このようにして得られる「調整速度」は判別関数モデルが示す最も蓋然性のある構成比に対して月単位での程度の速度で、ないしはどの程度の影響力で前期の構成比から預金者が修正していったかを示す。各期ごとに得られた「調整速度」で再度、推定構成比を修正すると、定期預金特性の改訂に対する預金者の適合度を考慮した推定値を得る。たとえば46年9月期でみると表4-1-5となる。比較的良好に合致しており、残された課題は平均預入期間の推定になる。

5. 平均預入期間の推定

前章までで平均預入期間を知ることができれば、各種の定期預金種別にどのように資金が配分されるかを知ることができた。つぎの課題として預金者がいかなる平均預入期間を選択するかを知る必要がある。連続変数予測の一般的な方法——最小二乗法——で分析する。

ここで説明変数として、

① 定期預金種別特性に固有な平均預入期間… M^*_i

預金者は経済環境の変化の中で適切な平均預入期間を想定するであろう。しかし銀行定期預金に1年半、2年もの等新たな預金種別が新設されたならば、他の代替的な資金運用先から資金が流入するか、他の代替的な資金運用を予定していた資金を銀行定期に回すであろう。したがって、各時点の定期預金種別の組合せに固有な「平均預入期間」を想定する。この平均預入期間は、預金者が預入期間を考慮しないで単純に金利のみに注目して資金配分した結果、事後的に得られる平均預入期間とする。今、固有の預入期間を M^* とすれば、

$$M^* = \sum_{i=1}^N m_i q_i$$

となる。ただし、 q_i ：金利因子による構成比
 m_i ：第*i*種の預入期間

② 前期の平均預入期間… M_{t-1}

表 4-1-5

| | 定期預金種別 | 3カ月もの | 6カ月もの | 1年もの | 1年半もの |
|------------|-----------|----------------------------|--------|--------|--------|
| 昭和46年9月 | 期初構成比 | 7.48% | 8.77% | 77.68% | 6.07% |
| | 期末判別関数推定比 | 14.98% | 20.75% | 28.89% | 35.38% |
| | 期末構成比 | 9.90% | 11.43% | 60.26% | 18.26% |
| | 修正推定構成比 | 10.24% | 13.18% | 59.75% | 16.84% |
| χ^2 値 | | 0.37 < 5.99 (自由度2, 有意水準5%) | | | |

$$\alpha_t = 0.632 \quad \beta_t = 0.368 \quad \rho_t = 0.0969$$

定期預金構成比における調整速度と同じように平均預入期間に対しても同様の調整速度を考える。定期預金は預入期間という拘束性をもっているため、6カ月間の短期間には、預金者が適切と考えている平均預入期間に合致させることはできない。たとえば2年定期しかもっていない預金者は、事情の変化があっても2年間は変更できない。または預入期限が到来して修正できる人もいる。一般的には、少なくとも6カ月前の平均預入期間と独立に今期の平均預入期間を預金者全体としては決定できない。したが

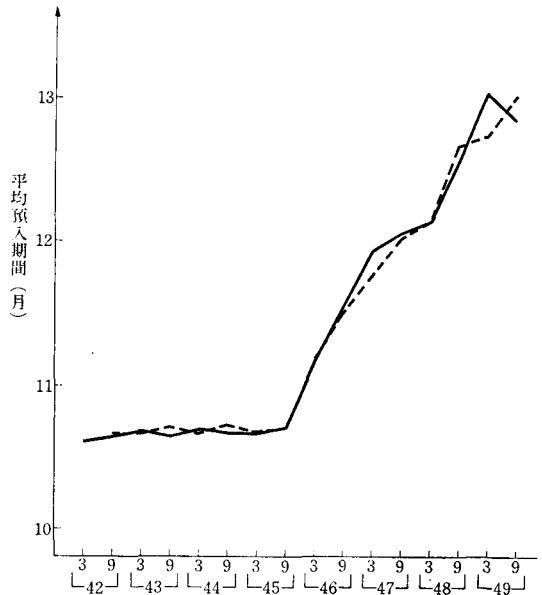


図 5-1 平均預入れ期間の推定

$$\hat{M}_t = 2.22 + 0.6926 \cdot M_{t-1} + 0.1453 \cdot M^*_i$$

(8.52) (5.04)

$$R^2 = 0.979 \quad () \text{内 } t \text{ 検定値}$$

\hat{M}_t : t 期の平均預入期間(月)

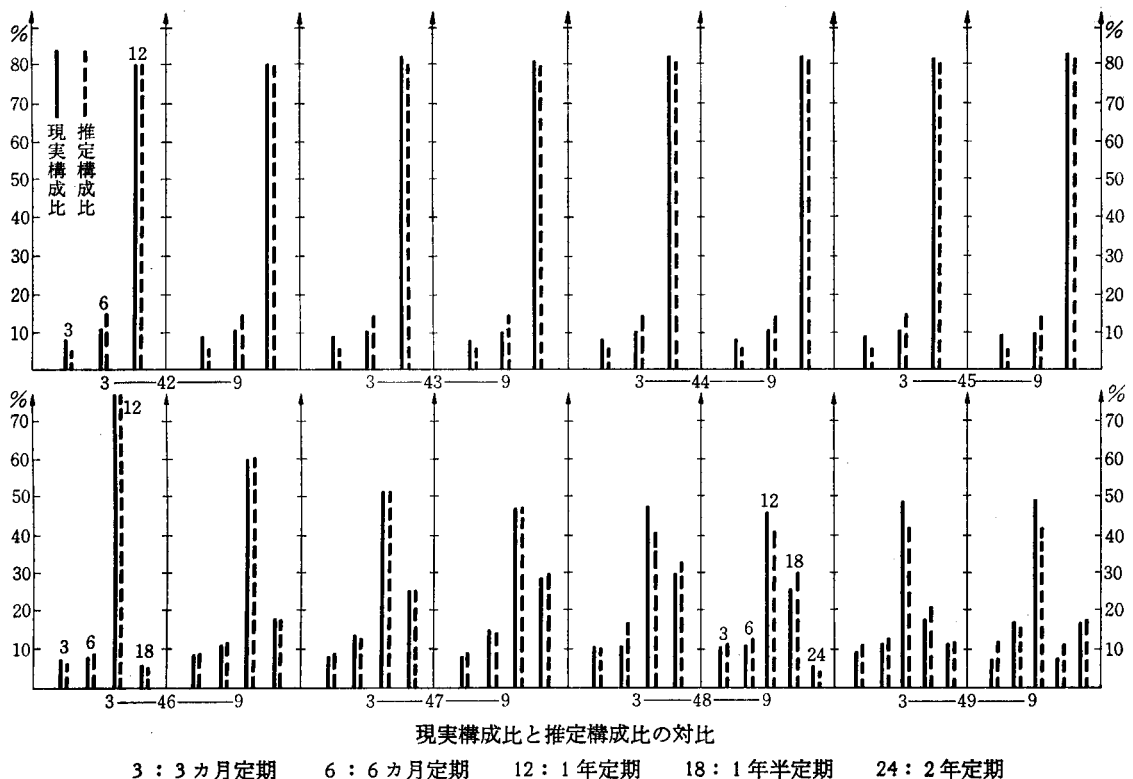
M_{t-1} : $t-1$ 期の平均預入期間(月)

M^*_i : t 期の定期預金種別の組合せに固有な平均預入期間(月)

資料一覽 (Source: The Bank of Japan)

| 月末 | 金利 (年率) | | | | | 構成 (上段金額 単位百万: 下段 構成比%) | | | | | | 平均 預入期間 | 平均 約定金利 | 名目勤勞 者所得 (前年同期比) | 同左 実質 | 消費者物 価 指数 (同左) |
|----|---------|------|------|-----------|------|-------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|------------------------|------------|------------|------------|------------------------|----------|----------------------|
| | 3カ月 | 6カ月 | 1年 | 1年 6カ月 | 2年 | 3カ月 | 6カ月 | 1年 | 1年 6カ月 | 2年 | 計 | | | | | |
| 42 | 3 | 4.00 | 5.00 | 5.50 | | 599,906 (8.1668) | 815,048 (11.0956) | 5,930,731 (80.7376) | | | 7,345,686 | 10.5993 | 5.3220 | 9.5981 | 5.1909 | 4.4072 |
| | 9 | 4.00 | 5.00 | 5.50 | | 640,476 (8.0855) | 861,074 (10.8703) | 6,419,784 (81.0442) | | | 7,921,336 | 10.6201 | 5.3244 | 11.3971 | 8.0922 | 3.3049 |
| 43 | 3 | 4.00 | 5.00 | 5.50 | | 653,861 (7.8992) | 835,986 (10.0994) | 6,787,693 (82.0013) | | | 8,277,541 | 10.6831 | 5.3310 | 11.7512 | 5.9813 | 5.7699 |
| | 9 | 4.00 | 5.00 | 5.50 | | 715,408 (8.02341) | 969,347 (10.8714) | 7,231,762 (81.1052) | | | 8,916,518 | 10.6256 | 5.3253 | 10.3791 | 4.3333 | 6.0458 |
| 44 | 3 | 4.00 | 5.00 | 5.50 | | 755,409 (7.7641) | 981,321 (10.0861) | 7,992,744 (82.1498) | | | 9,729,474 | 10.6961 | 5.3330 | 10.9682 | 6.5821 | 4.3860 |
| | 9 | 4.00 | 5.00 | 5.50 | | 854,170 (7.7946) | 1,175,241 (10.7244) | 8,929,116 (81.4810) | | | 10,958,527 | 10.6550 | 5.3295 | 11.6426 | 5.4851 | 6.1575 |
| 45 | 3 | 4.00 | 5.00 | 5.50 | | 940,662 (8.1054) | 1,169,428 (10.0766) | 9,495,324 (81.8180) | | | 11,605,414 | 10.6659 | 5.3280 | 13.9669 | 6.5073 | 7.4596 |
| | 9 | 4.00 | 5.00 | 5.75 | | 987,738 (7.8565) | 1,231,029 (9.7917) | 10,353,444 (82.3518) | | | 12,572,211 | 10.7054 | 5.5391 | 15.2835 | 7.6675 | 7.6160 |
| 46 | 3 | 4.00 | 5.00 | 5.75 | 6.00 | 996,179 (7.4790) | 1,168,244 (8.7708) | 10,346,902 (77.6809) | 808,429 (6.0694) | | 13,319,754 | 11.1648 | 5.5685 | 15.2557 | 7.7257 | 7.5300 |
| | 9 | 4.00 | 5.00 | 5.75 | 6.00 | 1,543,705 (9.8961) | 1,782,665 (11.4279) | 9,399,641 (60.2576) | 2,873,128 (18.4185) | | 15,599,106 | 11.5288 | 5.5372 | 10.3752 | 3.4805 | 6.8947 |
| 47 | 3 | 4.00 | 5.00 | 5.75 | 6.00 | 1,564,036 (8.7229) | 2,441,579 (13.6171) | 9,334,462 (52.0599) | 4,590,157 (25.6001) | | 17,930,234 | 11.9339 | 5.5592 | 8.6905 | 3.5636 | 5.1269 |
| | 9 | 3.75 | 4.75 | 5.25 | 5.50 | 1,829,900 (8.6086) | 3,247,831 (15.2791) | 9,968,713 (46.8967) | 6,210,303 (29.2157) | | 21,256,747 | 12.0614 | 5.1175 | 10.5704 | 5.7563 | 4.8141 |
| 48 | 3 | 3.75 | 4.75 | 5.25 | 5.50 | 2,541,741 (11.2242) | 2,502,712 (11.0518) | 10,805,564 (47.7167) | 6,795,237 (30.0073) | | 22,645,254 | 12.1272 | 5.1014 | 13.2489 | 7.3098 | 5.9391 |
| | 9 | 4.00 | 5.00 | 6.00 | 6.25 | 2,626,085 (10.9708) | 2,661,242 (11.1177) | 11,071,758 (46.2538) | 6,313,750 (26.3766) | 1,264,134 (5.2814) | 23,936,969 | 12.5619 | 5.7618 | 17.0051 | 4.7840 | 12.2211 |
| 49 | 3 | 5.25 | 6.25 | 7.25 | 7.50 | 2,213,235 (9.2764) | 2,753,940 (11.5426) | 11,672,628 (48.9237) | 4,304,717 (18.0425) | 2,914,304 (12.2148) | 23,858,824 | 13.0289 | 6.7992 | 20.9192 | 1.4113 | 19.5079 |
| | 9 | 5.50 | 6.75 | 7.75 | 8.00 | 1,987,431 (7.8807) | 4,356,581 (17.2750) | 12,449,815 (49.3667) | 2,055,588 (8.1509) | 4,369,628 (17.3267) | 25,219,043 | 12.8224 | 7.3210 | 28.9512 | 3.6917 | 25.2595 |

金利：銀行定期預金金利 構成：全国銀行期間別定期構成比 (都市銀行)



って前期の平均預入期間を先決説明変数として採用する。

以上の説明変数によって、昭和42年から昭和49年までの資料をもとに、最小二乗法により計量すると図5-1となる。

6. むすび

本文は「預金者はいかなる要因によって銀行が提供する定期預金種別を選択するのか」という疑問に計量的に答えようとした。「銀行定期預金種別選択モデル」から得られる結論的なことを列挙すると、

- [1] 過去の平均預入期間および定期預金種別特性の組合せに固有な平均預入期間の情報によって、預金者は当期の平均預入期間を決定している。
- [2] 預金者は定期預金の平均預入期間の制約のもとで、預金者個々の価値感の多様性、および情報伝達の不完全性により、エントロピーが最大になるように、各定期預金種別間に資金を配分している。
- [3] 定期預金の種別特性が安定している時代は平均預入期間の制約下で獲得する金利ができるだけ大きくなるよう各定期預金種別間に資金を配分している。
- [4] 定期預金の種別特性の改訂が激しい時代においても、本質的行動は[3]と同じであるが、預金者は判

別関数モデルの推定比に向かって預金構成比を調整している。そしてその影響力(β_i)は6カ月ではほぼ33%である。

となる。定期預金は確定利子付き債権であり、元利ともに安全な資産である。しかし有期性があるという点で、預金をする側には流動性不足に対する危険性がある。移動時間、移動コストを考えれば、即時引き出しができる普通預金と言えども預金者からすれば、ある種の有期性をもっていると考えるべきであろう。また預金者は一般的な集団ではなく、多種多様な個性の集団であり、われわれが知りうる情報も不完全性をもっている。このような銀行定期預金種別選択行動をとりまく、さまざまな多様性、あるいはあいまいさをエクスプリシットに取り扱うことによって預金者行動の真の姿が画けるのではないだろうか。末尾ながら筑波大学・高橋啓郎教授に多くのご指導をいただいたことを深く感謝します。

参 考 文 献

- [1] 永野正一・山下邦男 監訳 現代の金融理論 I 勁草書房 1965
- [2] 国沢清典 著 エントロピーモデル 日科技連1975
- [3] 国沢清典 著 ORのための情報理論入門 日科技連 1972

(こにし・きよし 三和銀行 事務指導部)